

## 四国遍路の映像社会学

### 移動する巡礼者と地域住民の動的関係イメージ

慶應義塾大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC 後藤一樹

#### 1 目的

近年、「映像 moving image」を用いた社会学的研究の可能性に関する議論が活発になっている。他方、これまでの議論では、映像制作における「カメラマン（調査者）」と「被写体（被調査者）」の関係性の問題が指摘されながらも（丹羽2003; 石田2009; 安川2009）、その関係性を映像の本質である「動くイメージ」そのものによっていかに実証するかについては明確に論じられてこなかった。従来の研究が、映像の動きを区切り分節化する言語論的方法（Saussure 1910=2007: 102-3）に強い影響を受けていたためである。本報告の目的は、「時間対象」（Stiegler 1996=2010: 390）としての映像の流れの分析を通して、四国遍路における巡礼者と地域住民のミクロな相互行為のあり方を、アクター間の「運動」や「対話」の動的な関係性の変化において明らかにすることにある。

#### 2 方法

報告者は、2015年より継続的に、四国の遍路道を巡礼者として歩きながら、そこで報告者が出会った地域住民や他の巡礼者との相互行為を自身のビデオカメラの映像に記録してきた。本報告では、それらの映像の中から、出会いの動態が顕著に表れているシーンを幾つか選んで上映し、動く「関係イメージ」の諸形式を検証する。本報告の方法は、「カメラ」と「被写体」の運動関係を動く映像それ自体において考察したジル・ドゥルーズの「関係イメージ」論（Deleuze 1983=2008: 344-9）を批判的に継承したものである。本報告では、ドゥルーズが看過していた撮影主体としての「カメラマン」の動きも重要視し、「カメラマン」-「カメラ」-「被写体」の三項関係の動態として「関係イメージ」を定義しなおす。また、四国遍路を通し打ちで行う場合、約1200kmの道のりをおよそ40日間かけて歩く巡礼者の身体は常に「移動」していることから（後藤 2015: 155）、アン・フリードバーグが指摘した映像を消費する観客の「移動性をもった視線」（Friedberg 1993=2008: 3）を、映像を生産する巡礼者としてのカメラマンの「移動性をもった視線と身体」に読み替えて検証を行った。

#### 3 結果

「関係イメージ」の基本構造は、カメラマンと被写体間の「縦の動線」と、被写体と被写体間の「横の動線」が交わることで形成される「動く三角形」であることが明らかになった。この構図を用いて四国遍路の映像を検証すると、一見固定的に見えるカメラマン（巡礼者）と被写体（地域住民）双方のパースペクティブは、微細に、またある時は大きく揺れ動き変化していることが分かった。また、巡礼者に対してなされる地域住民の「お接待」や四国遍路の関係性を象徴する「お大師さん」の物語を媒介に、アクター同士の発話が交響するメロディーのように時間的な映像において現象していた。カメラマンと被写体の関係には、以下のような諸形式が見られた。1) 行動の「交差イメージ」、2) 語りの「対話イメージ」、3) 知覚の「交換イメージ」、4) カメラマンの身体を虚焦点としたランドスケープの「転回イメージ」。

#### 4 結論

『般若心経』には、次のように解される一節がある。「この世のあらゆる存在は空であり、固定的実体はなく、常にあらゆるものと関係しあって変化している。生ぜず滅せず垢つかず浄からず増さず減らず」（お遍路手帳制作所 2014: 12）。四国遍路とは、移動する身体があらゆるものと関係しあい、「関係イメージ」の一環として変容し続けるプロセスのことである。そのような「縁」の網の目の中をうごめく「モビリティ」こそ、映像の社会学が射程に入れるべき領域である。